



TITLE:

三種の『資本論』 邦譯

AUTHOR(S):

河上, 肇

---

CITATION:

河上, 肇. 三種の『資本論』 邦譯. 經濟論叢 1920, 11(4): 551-559

ISSUE DATE:

1920-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/127706>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四號

第十一卷

## 論 說

農業社會主義論(一)……………

法學博士

河田 嗣郎

累進課税の弱點に就きて……………

法學博士

神戸 正雄

支那古來の限田說……………

文學士

小島 祐馬

價值論上のリカアドとマルクス(一)……………

經濟學士

堀 經夫

人格主義の立場に於ける經濟と人生の考察(二・完)……………

法學士

石川 興二

## 時事問題

排日問題に就きて……………

法學博士

神戸 正雄

我海運政策に對する國民の反省……………

法學博士

戸田 海市

## 雜 錄

三種の「資本論」邦譯……………

法學博士

河 上 肇

世界戰爭と人口の變動……………

法學士

汐見 三郎

朝鮮干瀉地利用論……………

經濟學士

三田村 一郎

新著紹介……………

法學士

汐見 三郎

## 雜 録

### 三種の『資本論』邦譯

河 上 肇

只今我國にはマルクスの『資本』を全譯せんとする三種の計畫が在つて、既に各々其の第一卷を公にしてゐる。(原本の標題は *Das Kapital* であるのに、三種の譯本とも『論』を附加して『資本論』と爲すことに一致してゐるのは、少し不思議の感じがする)。

第一は、商學士松浦要氏の獨力計畫に成るもので、『全譯資本論』と題し、大正八年九月に其の『第一冊』が公にされた。收むる所は、第一卷第一篇の第一章より第三章に至るまでである。

第二は、生田長江氏の同じく獨力計畫に成るもので、『資本論』と題し、大正八年十二月に其の『第一分冊』が公にされた。收むる所は、第一卷第一篇の第一章より第三章まで、及び同じく第二篇の第四章である。

第三は、高畠、左右田、坂西、高橋、寺尾、大塚、金子、福田の八氏が分擔して譯筆を執るといふ計畫のもので、福田博士が其れに校註を加へらるゝ筈になつてゐる。之は『マルクス全集』の第一期の事業に屬するもので、近頃公にされたのは、『資本論』の『第一卷第一冊』である。其の發行は最も後れて、大正九年の六月になつてゐる。收むる所は、第一卷の第一篇、第二篇、及び第三篇の三篇で、合計九章に及んでゐる。さうして此の部分は、翻譯分擔者の一人なる高畠氏が専ら筆を執つて居られる。

此等三種の譯書の中、第一冊の發行の早いのは、松浦第一、生田第二、高畠第三の順序になつてゐるが、その代り、松浦氏のは第一卷の第一篇だけ、生田氏のは第一卷の第一篇及び第二篇、高畠氏のは同じく第一卷の第一篇、第二篇、及び第三篇と云ふやうに、後れて出たものほどの翻譯の分量は多くなつてゐる。しからは其の翻譯の品質は何うであるか。その點を少しく調べ

て見たいと思ふ。

さて此等三種の譯本をば其の全體に亘つて比較することは、私の今爲し得ざる所である。さればとて、見本のため一二の箇所を選ぶとすれば、その如何なる部分を探るべきかにつき、聊か迷はざるを得ぬ。只私は、嘗て松浦氏の譯本を批評したることあるが故に、茲には其れに基き、當時引用したる所を、重ねて利用することにしたいと思ふ。

先づ卷頭第一の文句を見る。それは三種の譯本に其れ／＼次の如く爲つてゐる。

(松浦氏譯文)『資本制生産方法が専ら行はれる社會の富は、「巨額なる商品の集積」で、個個の商品は之を組織するもの、形式のやうに思はれる。故に吾人の研究は商品の分析を以て端を開かう。』

(生田氏譯文)『資本家的生産の支配してゐるやうな社會の富は、「巨大なる商品の集積」として現れ、個々の商品はその單位として現

はれる。そこで我々の討究は商品の分析から始められねばならぬ。』

(高島氏譯文)『資本制生産方法の變つてゐる諸々の社會の富は「巨大なる商品集積」として現はれ、個々の商品は其の成素形態として現はれる。故に我々の研究は商品の分解を以つて始まる。』

之に相當する原文及び英譯は次の如くである。

(原文) Der Reichtum der Gesellschaften, in welchen kapitalistische Produktionsweise herrscht, erscheint als eine „ungeheure Warensammlung“, die einzelne Waare als seine Elementarform. Unsere Untersuchung beginnt daher mit der Analyse der Waare.

(英譯) The wealth of those societies in which the capitalist mode of production prevails, presents itself as “an immense accumulation of commodities,” its unit being a single commodity. Our investigation must therefore begin with the analysis of a commodity. \*

右に列舉した範圍内では、先づ次のことが言へるやうに思はれる。

第一に、松浦氏の譯文には、誤譯としか思は

\* 英譯は Moore and Aveling の譯文にて Untermann の校訂せしものを探る、後に英譯別本と謂ふは London, William Reeves の出版に成れる Bellamy Library の版本を指す。

れぬ點が在るやうである。即ち原文に *Der Reichthum.....erscheint als..... die einzelne Waare als Elementarform* とあるのを「.....個々の商品は之を組織するもの、形式のやうに思はれる」と譯出して居られるが、その中、少くとも、*erschient als* を『のやうに思はれる』と譯してあるのは、明かに誤謬だと謂はなければなるまい。又 *Elementarform* を『之を組織するもの、形式』と譯されてゐるのは、意味が通じないことを謂はなければならぬ。

第二に、生田氏の譯文には、英譯を参照された跡が見えるやうである。例へば *Elementarform* は、英譯には *unit* と譯してあるが、(尤も英譯別本には直譯して *elementary form* としてある)、生田氏も『單位』と譯して居られる。又 *Uneure Untersuchung beginnt daher.....* と云ふ所も、英譯には *must begin* としてあるが、生田氏の譯文にも『始められねばならぬ』としてある。

第三に、高島氏の譯文には、獨逸の原文を一語一語に逐うて、原語の語形並びに品詞的性質

を維持せんと努めた特徴が在る。例へば社會といふ字が原文に複數を用ゐてあるがためであらう、譯文には『諸々の社會』とされてある。又 *Waarensammlung* と云ふ一語は、英譯には *accumulation of commodities* と三語になつて居り、生田氏も『商品の集積』とされてゐるが、高島氏は『の』を省いて『商品集積』とされてゐる。*Elementarform* もそのまゝに『成素形態』としてある。

さてその次は何うなつてゐるか。

(松浦氏譯文『商品』は「を脱す?」、先づ第一に外界の目的物であり、其性質に依て種類の如何を問はず人間の慾望を充たす物である之等慾望の性質は、胃から發するものであらうと、空想から生ずるものであらうと、其結果に違ひはない。又其物が人間の慾望をどう充すか、生活資料として即ち享樂の目的物として直接に充たすか、又は生産手段として間接に充たすかも、茲に問題となるものではな

い。』

(生田氏譯文)『商品は先づ、一個の外的對象である。その特性によつて何等かの人間の欲望を満足さすところの事物である。斯うした欲望の性質は、それらのものが例へば胃腑から生じて來ようとも、或は空想から生じて來ようとも、別に異つたことはない。此場合、その事物が如何やうにして人間の欲望を満足さすかといふことも、直接に生活資料として、即ち享樂の對象として満足さすか、それとも迂路をして、生産手段として満足さすかといふことも、問ふところではない。』

(高島氏譯文)『商品は先づ、外界の一對象である。即ち其諸々の性質に依つて、人類の何等かの種類の欲望を充たす一の物である。此欲望の性質如何、即ち其れが胃腑から起るか、又は空想から起るか、些の變化を與ふることはない。又、其物が如何やうにして人類の欲望を充たすか、例へば直接に生活資料として、即ち享樂の對象としてか、それとも

間接に生産機關としてか、それも茲では問題とならない。』

前例によつて、之に相當する獨逸原文及び英譯文を次ぎに掲げる。

(原文) Die Waare ist zunächst ein äusserer Gegenstand ein Ding, das durch seine Eigenschaften menschliche Bedürfnisse irgend einer Art befriedigt. Die Natur dieser Bedürfnisse, ob sie z. B. dem Magen oder der Phantasie entspringen, ändert nichts an der Sache. Es handelt sich hier auch nicht darum, wie die Sache das menschliche Bedürfniss befriedigt, ob unmittelbar als Lebensmittel, d. h. als Gegenstand des Genusses, oder auf einem Umweg, als Produktionsmittel.

(英譯) A commodity is, in the first place, an object outside us, a thing that by its properties satisfies human wants of some sort or another. The nature of such wants, whether, for instance, they spring from the stomach or from fancy, makes no difference. Neither are we here concerned to know how the object satisfies these wants, whether directly as means of subsistence, or indirectly as means of production.

(英文別譯) A commodity is firstly an external object, a thing which by means of its properties satisfies, in

some way or other, a human necessity. The nature of this necessity—whether, for example, it proceeds from the stomach or from the fancy, makes no difference in the thing itself. The question now is not how the object supplies human necessity, whether directly, as a means of subsistence or an object of enjoyment, or in an indirect way, as a means of production.

右に列擧した範圍内でも、第一松浦氏の譯文については、前に言つたと同じやうなことが、即ち譯文には誤謬があると云ふことが、矢張り言ひ得らるゝと思ふ。即ち原文には *ingend eines Art* とあり、英譯には *of some sort or another (又は in some way or other)* とあつて、正に『何等かの種類の』と譯出すべき所が、『種類の如何を問はず』とされてゐるのは、少くとも、原文の意味を不正確にしたものと謂はなければならぬ。何故といふに、何等かの種類の欲望を充すと云ふ代りに、種類の如何を問はず欲望を充すと云ふ時は、如何なる種類の欲望をも總て之を充すものゝ如く解せらるゝ虞があるからである。

しかるに、生田氏及び高畠氏の譯文については、此の場合、前に述べたことが必ずしも當嵌らぬやうである。勿論 *ingend einer Art* が生田氏に在つては單に『何等かの』とされて居り、高畠氏に在つては『何等かの種類の』とされて居る點や、又、生田氏には『その特性によつて……欲望を満足さすところの事物である』となつてゐる所が、高畠氏には『其諸々の性質によつて……欲望を充たす一の物である』となつてゐて、一々原文通りに單數複數が區別してある點などは、矢張り高畠氏の譯文の方が『獨逸の原文を一語々に逐うて、原語の語形並びに品詞的性質を維持せんと努めた特徴が在る』と言へるやうである。しかし生田氏の譯文には『それらのものが例へば胃腑から生じて來ようども、或は空想から生じて來ようども云云』とある所が、高畠氏には『其れが胃腑から起るか、又は空想から起るか云々』となつてゐて、即ち原文には *n.B.* とあり、英譯には *for instance (又は for example)* とあるのが、却

て高畠氏の方に脱けて居り、又原文には *indirectly* einem Umweg とある所(英譯には單に *indirectly* となつてゐる所)が、生田氏には『迂路まわみちをして』と譯出してあるのに、高畠氏には只『間接に』としてある所などを見ると、生田氏の方が原文により近いやうな點もあるのである。又 Produktionsmittel といふ字は、高畠氏には『生産機關』と譯出してあり、生田氏には『生産手段』と譯出してあるが、これも生田氏の譯の方が恐らく原語の意味に近かゝらう。Produktionsmittel といふ中には、簡單な道具や原料なども含まれてゐるのだから、それを『機關』と謂ふのは不適當ではあるまいかと思ふ。

以上は開卷第一の所を比較して見たのであるが、私は更に數頁を飛ばして、今一個所だけ、三種の譯本を比較して見やうと思ふ。

(松浦氏譯文)『其處で吾人は勞働生産物の殘滓を觀察しやう。其生産物から殘つたものは幻影のやうな目的物、即ち無差別な人間勞働

の塊りに過ぎない。形式を度外視せる人間勞働力の支出である。之等の物體は、生産に人間の勞働力が費され、人間勞働力の集積されたものであることを語るに止まる。物體に共通な此社會的實體の結晶として見るとき、其は價值——商品價值をなすものである。』

(生田氏譯文)『我々をして今勞働の產出物の殘留物を考察せしめよ。それらの產出物に残つてゐるのは、同一の幽靈的な對象性である。無差別的な人間の勞働の單なる凝塊である。即ち費しかたに顧着せずして費されたる人間の勞働力の單なる凝塊である。此等の事物はたゞ、それを產出する爲めに人間の勞働力の費されてゐること、その中に人間の勞働の堆積されてゐることを吾々に語るに止まる。それらの物に共通な此社會的實體の結晶として、それらの物は價值——商品價值である。』

(高畠氏譯文)『然らば勞働諸生産物の殘基は何であるか、之れを考察しやう。右の抽象の



後に勞働生産物に残るものは、只、同一なる空幻の對象性である、即ち無差別なる人間勞働の、換言すれば其支出の形式に頓着なき人間勞働力の支出の單なる凝結のみである。之等の物は結局たゞ、其生産の爲に人間勞働力が支出され、人間勞働が堆積されてあることを示すに止まる。之等の物は、共通なる社會的實體の結晶として、價值——商品價値である。』

(原文) Betrachten wir nun das Residuum der Arbeitsprodukte. Es ist nichts von ihnen übrig geblieben als dieselbe gespenstige Gegenständlichkeit, eine blosse Gallerie unterschiedsloser menschlicher Arbeit, d. h. der Verausgabung menschlicher Arbeitskraft ohne Rücksicht auf die Form ihrer Verausgabung. Diese Dinge stellen nur noch dar, dass in ihrer Produktion menschliche Arbeitskraft verausgabte, menschliche Arbeit aufhäuft ist. Als Krystalle dieser ihnen gemeinschaftlichen gesellschaftlichen Substanz sind sie Werthe—Warenwerthe.

今、右に掲げた範圍について見るも、第一の松浦氏の譯文には、重大なる誤謬があると謂は

ねばならぬ。即ち dieselbe gespenstige Gegenständlichkeit を單に『幻影のやうな目的物』と譯して、dieselbe を無視して居らるゝが如き、又 eine blosse Gallerie を單に『塊り』と譯して、blosse を無視して居らるゝが如き、此等はまた忍ぶべしとするも、in ihrer Produktion menschliche Arbeitskraft verausgabte, menschliche Arbeit aufgehäuft ist を譯して『生産に人間の勞働力が費され、人間勞働力の集積されたものである』として、マルクスが前後を通じて常に區別して使用してゐる所の Arbeitskraft (勞働力) と Arbeit (勞働) とを、同じやうに『勞働力』と譯出して居られるのは、非常な欠點だとしなければならぬ。マルクスの用語例に従へば、或物に勞働力が費された結果、其物に勞働が蓄積されることになるのであるから、『生産に人間の勞働力が費され、人間勞働力の集積されたもの』といふ言葉の使ひ方は、全く意味を成さぬのである。

次ぎに生田氏及び高畠氏の譯文を比較するに、——同じ人の文章でないから當り前のこと

でもあらうが——矢張り其の間に多少の相違がある。例へば *menschliche Arbeit, menschliche Arbeitskraft* 等を、生田氏は『人間的労働』及び『人間的労働力』とされてゐるのに、高畠氏は單に『人間労働』『人間労働力』とされてゐる。即ち此等の場合には、却て生田氏の方が原語の品詞的性質を維持しやうとせられてゐるやうに見える。蓋し高畠氏が『人間的』といふ言葉を避けられたのは、同じ人間の労働に人間的なものと人間的でないものがある云ふやうに、人間的と云ふ言葉を人間らしきと云ふ意味に用うる場合があるので、それと混同することを嫌はれたのかも知れない。しかし *Als Krystalle diesen gemeinschaftlichen gesellschaftlichen Substanz sind sie Werthe — Warenwerthe* を、生田氏は『それらの物に共通な此社會的實體の結晶として、それらの物は價值——商品價值である』として居らるゝに、高畠氏が之を『之等の物は、共通なる社會的實體の結晶として、價值——商品價值である』と譯出して *dieser ihnen* の「字

を無視して居られるのは、別に理由あることゝも思へぬやうである。私は先きに第一の引例について述ぶる際、『高畠氏の譯文には、獨逸の原文を一語／＼に逐うて、原語の語形並びに品詞的性質を維持せんと努めた特徴がある』と言つたが、茲に引く第三の例では、生田氏の譯文との比較に於て、高畠氏の方に、さういふ特徴がより多くあるとも言へぬやうである。

猶ほ序に述べて置くが、*ohne Rücksicht auf die Form ihrer Veranlagung: ...* 云ふ句を、生田氏は『費しかたに頓着せずして費されたる人間的労働力云々』と譯して居られるが、それでは、その労働力は、費しかたに頓着せずして無茶苦茶に費されたる労働力のやうに聞えて、誤解を生ずる餘地が十分に在ると思ふ。高畠氏も『其支出の形式に頓着なき人間労働力の支出云云』と譯出して、生田氏の『頓着せずして費されたる』といふ代りに、『頓着なき支出』といふ言葉を用ゐて居られるが、さう書き改へて見ても、矢張り前に述べたやうな誤解を生ずるの餘

地が全く無いとは言へぬと思ふ。私は嘗て此の一句を譯して『如何なる形態に於て費されたるやに關係なく、兎も角人間の勞働力の支出の云云』としたことがあるが、こうしては随分原文と離れるけれども、その代りに述べたやうな誤解を生ずる虞はあるまいと思ふ。

以上私は、嘗て松浦氏の譯本を批評した際に引用した場所につき、三種の譯本を比較して、思ひ付きのまゝを述べた。それは言ふまでもなく全體の中の極めて些細なる一小部分であり、且つ只それだけの部分の比較で、三種の譯本の特徴が分る譯は勿論ないのだが、それかと言つて、全體について三種の譯本を互に比較し、且つ之を一々原文と對照して見ると云ふことは、只今私の到底爲し得ざる所であるから、その全體に亘つての價值判斷を下すことは、暫く差控へて置くの外あるまい。乃ち私は只、數年前までは殆ど思ひも寄らなかつたマルクスの資本論の邦譯の計畫が、同時に並行して三種までも着手

されてゐると云ふやうな、マルクス學の我國に於ける興隆を祝し、且つ三種が假令三種までゞなくとも、せめて一種なり二種なりが、完全に最後まで遂行されて、吾々が兎も角日本文で資本論を読み得る日の、一日も早く到來せんことを祈つて、此の紹介の一文を終ることにしようと思ふ。